

述 語 に つ い て

— 範疇論を中心として —

両 角 克 夫

I 問題の提起

Help !

Oh, wonderful !

などの語、又は語群は話者の意識に浮んだ表象又は idea をそのまま発話 (utterance) の形式として表現したものである。

こゝでは、言語表現は未だ判断としての命題の形式にまで展開せず、直観的表現に留っている。然し、これが "I beg you to help me". とか "The sight is wonderful". にまで展開すると、表象は分析的な命題の構造をとるようになり、言語表現に於ける「文」(sentence)、論理に於ては「判断」(judgement)を構成し、こゝにはじめて主語と述語が分離し、夫々が文法的、論理的考察の対象となって来るのである。

表現はすべて「意識」の反映である。勿論、意識は潜在意識、深層意識をも含んでいる。意識は多面的で且つ階層的であって、意志的なものを含むと同時に受動的反映の鏡でもある。

表現は、主体の意志に従って形成され創造される場合と、主体の意志にかゝらず或は主体の意志に反して表出される場合がある。又両者が混合している場合もあり、一見、意志的計画的でありながらその背後に主体の気付かないものをちらつかせる場合もあれば、表面いかにも無意志的に見えながらよく工夫計画されている場合もある。意識の構造と機能はそれ程複雑で流動的なために、その直接、間接の反映としての言語表現も亦複雑であることをまぬがれない。

然し意識の機能は、直観的記憶表象、知性的判断、情的意志、の三つに大きく区分することが出来よう (cf. Augustinus)。これらを統一するものが志向性である。

Descartes の ≪Cogito ergo sum.≫ に於ける cogito は、単なる知的思惟の機能を表すものではなくて、意識としての思惟を主体とのかゝわりに於て実存的に把握し表現したものと解したい。事実 Descartes は主体としての「我」の存在を根柢として出発するその哲学的方法を、Augustinus に負っていることは明白であろう。

人間の表現行為の中で言語表現 (parole) の特質は、概念の記号体系としての言語 (langue) を媒材とし又それに規制されていることである。概念を離れて言語は考えられない^①。然し概念は判断によって形成されるものであり、言語活動 (langage) とは、或る概念 (意味) と或る国語に於ける語 (mot) との結合及び語と語との連結による表現形成の行為過程であって、言語表現に密着する意識としては知的思惟の面が強調される。

我々が言語表現を行う場合、その内容は与えられたものであっても、如何に話すか (fa-

con de parler) は学習に基づいて工夫され、考えながら実践されるのである。従って直観的、表象的直接表現とも云うべき、"Help!" に於てもこれが概念記号としての語を媒材としている点で、知的思考作用を経過したものである。

思考作用は言語のみを媒介とするものではない。図形、数、音、等によって思考することは出来るが、時間的、空間的、心理的に、複雑なものを内容とする思考は今のところ概念の記号体系としての言語にたよらざるを得ないのであり、複雑な思考は判断を重ねて作られていくものであって、その判断の言語表現としての命題は主語と述語の構造を具えた文からなっている。勿論 synthetic language に於ては、かゝる表現形態は見られないが、思惟構造としては主語—述語に相当するものが内在している筈である。

論理は認識のための一つ的手段方法 (organon) であり、言語は論理を含みながらそれを超えてはいる。言語は、symbolic, logical な面と emotive な面をもつ⁽²⁾。たゞこゝで主張したいのは emotive language ですら概念記号としての言語本来の機能を媒材としている点であり⁽³⁾、概念と logic を通じて emotive language への道を進めるものと云えよう。こゝで、言語と論理とは、どうしても離れることの出来ない関係を露呈するのであり、文に於ける主語—述語の考察も言語と論理との連関、或はその中間地帯に於て進めざるを得ない。

Ⅱ 文法に於ける主語と述語

述語について考えるためには、主語との連関に於て観ていかななくてはならぬ。"Come." "Wonderful!" などの言語表現は主語が見当らなくて述語ばかりの如く思われるし、"Who went there?" に対する "You." には述語がなく主語ばかりの如く観える。形式的文法的にはたしかにそうであろうが、意識面から観ると、未分化の直観的表象であって、主語、述語に分化し判断を構成する以前の段階にあるものと云えよう。それらは一つの語でありながら、その situation に於て、semantical, contextual meaning を有し、話者の意向を伝達する目的を充足せんとする pragmatical meaning を有するものである。従ってこれらの語は、単語でありながら、所謂「文」を構成するものと云える。

然し、こゝでは主語に対する述語を中心として考察するものであって、未分化のものは対象とならない。

主語、述語の関係は従来の文法家によってどのように考えられて来たか。Otto Jespersen はその "The Philosophy of Grammar" (pp. 145-6) に於ていくつかの従来の定義をあげ、その曖昧さを指摘する。

(1) The subject is something said to be the relatively familiar element, to which the predicate is added as something new. これに対して Jespersen は、

This may be true of most sentences, but not of all, for in answer to the question "Who said that?" we say "Peter said it", Peter is the new element, and yet it is undoubtedly the subject. The "new information" is not always contained in the predicate, but it is always inherent in the connection of two elements, — ... i. e. in the "nexus", ...

(2) Others say that the rôle of the predicate is to specify or determine what was at the outset indefinite and indeterminate, but the subject is

thus a determinandum which only by means of the predicate becomes a determinatum. これに対して Jespersen は、

But this description is far more true of an adjunct as blusing in 'the blushing girl' than of 'blushes' in 'the girl blushes'. What is here made determinate is not the girl but the whole situation.

(3) Another definition that is frequently given is that the subject is what you talk about, and the predicate is what is said about the subject.

これに対して Jespersen は、

In such a sentence as "John promised Mary a gold ring" he would say that there are four things of which something is said, and which might therefore all of them be said to be "subjects", namely (1) John, (2) a promise, (3) Mary, and (4) a ring. This popular definition, according to which subject is identified with subject-matter or topic, is really unsatisfactory.

これらの Jespersen の批評は適当なものであるが、ではどのようにして主語と述語との責極的な考察と定義に向うことが出来るだろうか。そのために一応論理学に於ける主語、述語の歴史的考察を試みよう。

Ⅲ Aristoteles 論理学に於ける主語、述語

主語と述語との関係は、すでに Aristoteles に於て深い関心がはらわれていた。

"有ると言われるものども(諸存在)のうち、或るものは、何か或る主語(主体或は基体)について述語とされるが決して当の主語のうちには存しない。例えば一般に「人間」。……然るに他の或るものは、或る主体のうちに存するが併し如何なる主体の述語ともされない。例えば「この或る白さ」。……他の或るものは、主体のうちに存し且つその述語たり得る。一般に「知識」。……更に最後に他の或るものは如何なる主体のうちに存しもせずまた如何なる主体の述語ともならない。例えば「この人」、「この馬」がそれである。……要するに、不可分のもの(individa)(個体)、数的に一つなるものは、如何なる主語の述語ともならぬ(「Categoriae」1a16-b7)(出隆訳)。

以上に於て、注意すべきは主体又は主語(hypokeimeon, substratum)と述語(katēgoria, praedicamentum)の概念であり、こゝでは主語——述語の関係が存在論的に捉えられている。Aristoteles に於ては論理は存在認識のための道具(organon)であり、論理も言語も logos であって存在論と密着している。こゝでは Aristoteles に於ける述語(katēgoria)を中心に考察を進めよう。

katēgoria は accusation, assertion の意であるが、agora は assembly, market-place の意であり katá は against であるから、訴訟即ち特殊な事件を一般的な法に準じて判決することであり、更に意味を拡げて事物の意味を一般的に述べること、即ち述語を、更に最高類概念としての範疇を意味するようになる。

Aristoteles は10個の範疇をあげている。即ち N. E. D. の英訳に従えば (1) ousia——Substance or being (2) poson——Quantity (3) poion——Quality (4) pros ti——Relation (5) pou——Place (6) pote——time (7) keisthai——Posture (8) echein

——Having or possession (9) poiein——Action (10) paschein——Passion であるがこれら範疇の性質と意味については今日に到るまで論議されて来た。

(1)の実体範疇に属するものの中で唯一不可分の個体は、 $S \equiv S$, $S \neq \text{non } S$, $\text{non } S \equiv \text{non } S$, の如く「自らの述語」*praedicatum sui* となり得るのみで「他の述語」*praedicatum de alio* とはなり得ぬものであるが、命題学的に云って他者関連のものとしては、属性諸範疇は分析的他者関連を示す理由律、偶性諸範疇は総合的他者関連を示す因果律、適性範疇は合宜的他者関連を示す目的律となるのであるが、実体は同一、矛盾律に支配せられる以外の何ものでもない。(1)以外の範疇をなす、性質、分量、関係等は属性範疇に、能動、所動、時間、空間、状態等は偶性範疇に、所有は適性範疇に入るものである。自己関連の命題に関しては主語的範疇としての「実体」本質範疇が成立する⁽⁴⁾。

「……がある」と「……である」の区別は厳密でなくてはならぬ。即ち実体或は存在者とその在り方の判別に重点が置かれる時、主語と述語の概念も明白となる。ontology と phenomenology の二分野は、古代、中世、近世を通じて現代に到るまで哲学の中心課題であったと云ってもよい。Husserl, Heidegger, Sartre に於ける中心問題もそれであり、ちなみに Sartre の哲学的名著、*«L'Être et le Néant»* の副題として *Essai d'ontologie phénoménologique* の文字が見える。

命題は他言すれば定義と云われるものであって、実体本質に内属する属性を抽象して得られる類、種差の一般概念を以て事物の何であるかを規定しようとするものである(その限り第二実体以上のものを示し得ない)。

要するに、究極主語、即ち自らの述語($S=S$)となる以外他の述語となり得ないもの、即ち *hypokeimeon*, *substratum*, 以外のものはすべて述語となり得るのである。

以上は古代的、アリストテレス的存在論と演繹的論理学にもとづく述語の考察である。第二実体としての抽象名詞は文法上の主語となり得るものであり、存在論からの述語の定義は、「究極主語としての実体をのぞいた他の範疇」の如く消極的にのみ可能である。

実体は物自体 (*Dinge an sich*) であって、不可知であるとする近世的主観的観念論の立場は、中世存在論の *nominalism* の流れを汲むものであって、そこでは論理学の扱うべきものは存在の様式 (*modi essendi*) ではなく、知識の様式 (*modi intelligendi*) に限られ、論理学は形而上学から切り離される。

然し、*modi intelligendi* は *modi essendi* にもとづくとするアリストテレスの立場を表明する彼の範疇論は、中世の Thomas Aquinas 等によって命題学的、論理的に体系化された。

IV 中世存在論と述語

中世の存在論は Platon, Aristoteles などの古代ギリシヤの存在論を継承し神学によって方向づけられ独自の展開を示したものと云えよう。普遍と個物をめぐって存在とは何か、何が真の存在であるか、等を課題とする中世存在論は次の命題を中心として展開する。

- (I) *Universalia sunt realia ante res.*
- (II) *Universalia sunt nomina post res.*
- (III) *Universalia sunt realia in rebus.*

universalia は、本質であり形相でもある。*realia* は実在であり、*res* は個体である。従って命題(I)に於ては、*essentia* は *existentia* に先行する。真に存在するものは、普遍者であり、本質であって、経験的存在としての個体は普遍、述語に与って存在するものであって、普遍の本質が存在してはじめて個体も存在する。(I)に於ては、述語としての *universalia* は、存在でもあり、「……である」と「……がある」との結合体でもある。これこそ *ens a se* を意味するものである。

命題(II)に於ては、真に存在するものは個体のみであって普遍者、本質者は抽象的なものにすぎなく実在しない。こゝでは、経験的な個体、意志的な主体的個こそ実在であり、個と個をつなぎ統一する類も普遍も名目又は概念にすぎない。

命題(I)は明らかに Platon のイデア論の影響の下に、Anselmus によって唱道されたものであるが、形相は質料を本質に於て規定するとすれば最高の形相とは自らを規定する範疇であり、「……がある」の如く存在そのものとなり、存在が本質であるような存在者、あらゆるものを包む述語となり得ると同時に、自らの述語としては自らである以外にあり得ないような絶体的存在者こそ *universalia* なのである。

存在命題「……がある」は、主語——述語による文ではなく、主語——述語 による 断定が生ずる以前の確認の言語的表現であるという主張もあるが⁽⁵⁾、Platon に於ては、*on* (有) は、*tauton* (同)、*eteron* (異)、*kinesis* (変化)、*stasis* (持続)、などとともに最高概念に入れられている。且しプラトンは、有の取扱いに於て、(1)……がある(2)真である(3)……である 等に区別して問題を整理したが、彼に於ける真の有は *ontōs on* であり、それは即ち *eidos* であり、*esse* を包む *essentia* であり、*essentia* は *esse* 又は *existentia* に先行する。

命題(II)は、11世組の Roscellinus を先駆とするものであり、*existentia*、*esse* が *essentia* に先行する思想であり近世思想の個体主義、主観主義につながる思想である。

然し命題(I)と(II)は、やがて Abaelardus、Thomas Aquinas 等によって綜合され、個体と普遍、*existentia* と *essentia* は「内在」の思想によって媒介された。ちなみに、*existentia* のかわりに *esse* を用いているが、有の本質と現存との区別を始めて明白にしたのは Thomas であり Thomas 以後のスコラでは、*existentia* が用いられた。それはアリストテレスの存在論に多くを負うものであり、*essentia* は *existentia* の潜勢態であり、*ultima actualitas* なる現存によって顕現する。

こゝに興味深い帰結として、*essentia* と *existentia*、*esse*、とは別々に存在するのでなく、結びついて具象化し実在するという点であり、主語と述語とは、述語に主語が包まれると同時に主語は述語をさゝえるものである点で、結合し究極に於て一者となるということである。

V 近世哲学に於ける範疇論

以上に於ては、述語を範疇論 (*categoriae*) の中で捉え、主語——述語 の関係を言語外の世界の区別を反映するものとして、個——特殊——普遍 の区別は世界の区別を反映すると考えた古代中世の思想にそって主語——述語 の問題を論理学や存在論に結びつけて考察してきた。次に近世に於ける範疇論にそって主語——述語の問題を考えてみたい。

Universalia sunt realia in rebus、に見られるスコラ哲学の総合的性格は、普遍と

個、本質と存在、知と意志、の調和的統一を可能にしたかに見えたが、やがてこの調和は、*Universalia sunt nomina post res*, に見られる如き唯名論の傾向に分裂していく。

Duns Scotus に於ける主意的、個体的傾向は、個体は普遍と個性との結合体とするも、個体に於てのみ普遍は実在とする考えは、やがて普遍に対する個体の優位へ、個体主義へ、理性と信仰との分裂へと向い、彼の弟子 William Occam に於てはスコラ哲学、スコラ神学の瓦解を見る。かゝる14世紀の傾向はすでに近世を用意していた。

Descartes に於ける *Cogito ergo sum*, は自我の存在を中心としたものであって、自己の存在をさゝえるものは *cogitatio* なのである。*cogitatio* は意志を含む意識であり、意識は存在に先行する。Descartes に於ては実体即ち *ens a se* は神であり、有限の第二実体としての *ego* (精神) と外界 (物体) を考えるが、それらは互に独立して存在はするが、無限実体に依存するものであり、*ens ab alio* である。精神の述語としての *attributum* は *cogitatio* であり物体のそれは *extentio* である。又この二つの第二実体は上述の *attributa* と状態 (*modi*) を有する。従って Descartes に於ける範疇として、(1)実体、(2)第二実体、(3)不変本質 (*attributa*)、(4)状態 (*modi*) などがあり、(4)については更に感情、欲望、判断、及び位置、形状、運動、などが考えられる。

Descartes 哲学の中心は *substantiae* でありその実体論は、Spinoza, Leibniz の形而上学の中心課題でもあった。これは末だ古代、中世の形而上学につながるものであり、唯、実体への迫り方が *ego*, 意識、自覚、の側からのものである点で古代と異なる。自我、それは個体であり主観である。ここには近世を特徴づける、個から普遍への方が見られるのであり、これは中世末期の *nominalism* の傾向を受けつぐものと云えよう。然しここでは、思惟と存在との一致の可能性が確信され、それは Descartes に於ては神の誠実 (*veracitas*) によって保証される。ここには形而上学と神学との混淆が見られる。

やがて、Kant によって *Dinge an sich* に対する不可知論が提出され、近世的なものの典型が示される。即ち認識の対象は現象のみであって述語的であり、主体又は実体 (*subjectum, substratum*) は認識の対象とはなり得ない。対象を客体に限定することによって主体を対象から除外することは、一切の対象を主観に依存する *modi* とすることによって意識一般を設定するとしても自我的主観意識が主体、実体の位置を襲い物自体を対象界から切りはなそうとする近代主観主義、観念論が成立する。

従って Kant に於ては、範疇は実在の形式を示すものではなく、純粹悟性概念としての思惟形式であり、範疇の数は判断の種類と形式の数だけあることになる。それは4綱12目となる。即ち

Quantität : Einheit, Vielheit, Allheit.

Qualität : Realität, Negation, Limitation.

Relation : Substanz, Kausalität, Gemeinschaft.

Modalität : Möglichkeit, Dasein, Notwendigkeit.

然し上表で重要なものは Relation である。Kant は経験から独立している悟性の純粹概念としての範疇が対象即自然界に客観的に妥当するのは何故であるかの困難さに直面したのであるが、論理法則は実在法則の模写とする素朴実在論に対する批判もあって、Kant は実験的自我、意識一般を持出し、Hegel に到っては、それらの実体化としての絶対精神の弁

証法的発展を体系とする形而上学の出現となった。実体を主観としての認識主体の側に置き、述語としての客体を主観の主体に依存せしめたのは近世的観念的認識論の帰結であった。その後、物自体を含みぬ対象界を主観的意識に基礎づけても無意味であることを指摘したのは現象学である。

究極実体は主語と述語を成立させるものであり、主語の主語、述語の述語は究極に於て一致するであろう。それは、*ontōs on, ens a se*, であろう。これを完全に論述することは不可能に近いが、これは哲学と学問の歴史を通じての中心課題であったし今もそうである。新しい存在論、論理学、形而上学、はこれに答えようとするものでなくてはならぬ。

ドイツ観念論の結実とも云うべき Hegel 哲学に於ける範疇について一瞥する必要がある。Kant 及び新カント派の如く思惟形式を範疇と見る先験的哲学体系に対して、思惟の形式即實在の形式とし全体を論理的展開の過程と考え、その運動の形式を弁証法として把える方法は、形而上学的範疇論であり、アリストテレスに於ける実体は絶対者としての理論に転換し、理論の運動形式は、*an sich, für sich, an und für sich*, の段階を辿って自らを展開し、思惟とはこの理論のあとを辿ることである。従って論理学は抽象的範疇の学であると同時に、形而上学であり存在論でもある。Hegel の体系の第一部としての「精神現象学」はこの理論が存在論にまで到るべき序としての基礎的存在論である。彼の論理は、最も抽象的な「有」の概念から最も具体的な絶対的理論に到るまでの弁証法的図式範疇であり、その存在論は範疇として、「質」と「量」、本質論は「関係」と「様相」をとるものであり概念論は、存在と本質との「真理」を扱う。ここでは形式論理学の「概念」は神のロゴスとして絶対化され、哲学は論理的理念の宗教的観想に終るのである。

Hegel の形而上学的範疇論に対し、新カント派に於ける如く、数学に於ける「数」、自然科学に於ける「因果性」文化科学に於ける「価値」の如く範疇とは各科学の論理的基礎として、先天的又は先験的方法論的観念とされ、哲学は諸科学の範疇論となる。

近世以降の範疇論は、結局アリストテレスによって、意味をもつ言語表現にして真偽が語られるものとされた「命題」に於ける主語は実体から思惟主体としての意識一般又は先験的自我に転位し、主語を普遍に於て包み限定する範疇としての述語は認識の方法に転位した。Descartes から Kant, Hegel に到る近世の哲学は自我の意識によって物を包む思想であり、

$A \text{ is } B = I \text{ think } (A \text{ is } B)$

と図式化され得る。

Hegel などの形而上学では、*I think* の中に実体としての主語が含まれるのであり

$A \text{ is } B = A \text{ thinks } (A \text{ itself is } B)$

と図式化され得るであろう。

新カント派による認識論は、方法論であり

$A \text{ is } B = \text{We can consider in such a way as } (A \text{ is } B)$

と図式化されよう。つまり $A=B$ もそのような物の観方なのであり、数も因果性も価値も認識の方法としての範疇であって実体でも本質でもない。

近世的思考の流れに於ては、主語となって述語とならぬものは実体から認識主体に移行したのであるが、依然として、主語の展開としての述語であり、判断をささえるものは主語主体であり、換言すれば主語的論理であり有の弁証法であったと云えよう。

これに対して、述語的論理としての無の弁証法を展開したものが西田哲学である。

Ⅵ 西田哲学に於ける述語

西田幾多郎は「述語的論理主義」⁽⁶⁾なる論文で云う。

“私は主語が述語に含まれるといふ所謂包摂的關係を判断の根本的意義と考えたい。

“甲は乙であるといふ判断は之を裏から見れば、述語的一般者の自己限定と見ることができ、真の主語は一般者にあると考へることも出来るとすれば、かかる意味に於て一般者即ち場所が自己自身を限定したものが所謂一般的概念である。

“超越的场所の直接限定というのは自己の内に自己を限定するものを包むことである、即ち自覚することである。

“私は……主語がなくなると云うのではない、主語が述語の中に没入するのである……論理的意識とは自覚の不完全なるものと見るのである。……判断的意識とは自己の中に自己を含み得ない。自己自身を外に見て居る不完全なる意識である。……我々の真の知識は「我がある」と云うことから始る、「我がある」と云うことは場所が直ちに場所に於てあると云うことがある、それが内部知覚の立場、体験の立場である。……知的自覚の背後に意志的自覚がある、意志的自覚の根柢に直に自己自身を見るものがある。

“単に有に対して考えられた無ではなく、自己自身の中に自己自身を範疇的に限定するものである。範疇的に限定せられたものを自己自身の限定として自己自身の中に包むものである、自ら無にして自己の中に自己の影を映すものである。かかるものを自己自身を見るものと云うことができる。

“自覚とは無にして有を限定するものとも云うことが出来る。

“主語となるものが述語面自身の限定として述語的なるものが直に主語となった時、自己自身に同一なるものが考えられる……。

“自己自身の中に媒介を含むものに於ては、主語的方向に於て超越的なるものが考へられると共に、述語的方向に於ても超越的なるものが考へられねばならぬ”。

以上の引用は、Hegelの形而上学の一層の深化を意図するが如くである。西田哲学に於ける場所、無、述語、等の概念は、Hegelに於ける有、理念等の概念の転倒と拡大を志向するが如くである。

A is B に於ては、主語 A は対象界であり、noemaの世界である。is B は判断作用の過程であって noesis の世界に属するものであり、認識主体はむしろ述語に直結する。従って判断作用の主体面から A is B を見るならば、A は is B に包まれることになり、is B をささえるものは主体であり、ここに述語の論理の出発がある。A は is B に、is B は場所に包まれ、場所は主体化され、従って A is B は場所の自己限定、無の自覚的限定となるのである。

西田哲学に於ける場所的論理は、述語的論理の深化であるとしても、そこでは主語は述語又は場所に没し平面化する。それは汎述語主義であり、述語的方向に於て超越的なものが主張されてはいても、述語、場所、無、の概念は内在の方向の強化であり、一色に塗りつぶされた一元論的形而上学の姿を露呈して来る。ここで再び述語としての copula の意味を考えて見る必要がある。

連辞としての copula は主辞と賓辞を結ぶ機能を持ち、A is B、に於ける is であるが、"He has apples", の has もそれであるとする考え方もあろう。勿論、"He is (having apples)," と考えることが出来る。A is B の場合、B は A に内在する、B は A を包む、両方の考え方が可能であるが、copula を軸と考えると A が "is" を媒介として B に転ずる意味にもとれる場合があり、B は "is" を媒介として A を受取ることにもなる。つまり、A は B に没するのではなく、又汎述語主義でもなく、A は A、B は B、でありながら A と B とが copula を媒介として互に結合し、A is B 以前の A、B、とは夫々異なる新しい姿で A、B、が現成するとも考えられる。A、B、は夫々 A、B、であって同質化し一元化することではなく、互に緊張関係を保っている。ここでは copula の媒介機能が、A、B、を新しく作り出しているのである。A、B、の共存する場を作っているのは copula である。ここでは、主語の論理、述語の論理、に対して連辞の論理が考えられる。

一般に、copula は述語の中にあり、述語を導くとされる。とすれば連辞は場を作ると同時に時間の論理でもあり、空間と時間を統一する世界の論理でもある。

"The white rose" と "The rose is white" は、Otto Jespersen では "junction", "nexus"⁽⁷⁾ の如く区別されている如く、夫々異った意味をになうものであり、"nexus" の場合、copula が介在し、それは時間的展開の意味をもたせている。copula は動詞であり、従って Zeitwort であることに注意すべきであらう。それは実体の変化をも可能にするものなのである。主語の主語、述語の述語を考えると同時に、連辞の連辞、媒介を媒介するもの、を考える時、これら三者の関係こそ、言語表現、論理学、の根本問題として提示される。A is B、に於ては、言語主体は copula に直結するのであり、主体は自らを否定して A と B との媒介者となっているとも云えよう。

VII 文法範疇の背景

文法上の文の構成要素としての述語の考察は、発話の仕方、表現の仕方 (façon de parler, façon d'exprimer) にかかわるものであるが、それは思考方法、認識方法 (façon de penser, façon de connaître) に、更にこれは感じ方、ふるまい (façon de sentir, façon d'agir) にかかわるものであり、究極的には存在の在り方 (façon d'être, façon d'exister) に基づく。従って、文法範疇、論理範疇、心理範疇、などは皆、直接間接に存在論にかかわるものである。

H. Sweet は、grammatical category と logical category との関連についてのべている⁽⁸⁾。

"A group of grammatical forms expressing the same meaning—having the same functions—constitutes a grammatical category……"

Every grammatical category is the expression of some general idea—some logical category. Thus the grammatical category 'plural' expresses 'more-than-oneness', and therefore falls under the wider logical categories of 'number' and 'quality'; and the grammatical category 'tense' corresponds to the logical idea 'time'.

勿論、grammatical, formal category と logical category とは一致しない例もある。"It rains." の "It" は論理的には意味を持たない空しい "it" であり、文法的、形式的

のものにすぎない。又 "Men were deceivers ever." の如く, "tense" と "time" との不一致は文法上よく見られるものである⁽⁹⁾。

然し巨視的に見るならば, grammatical category は logical category に対応するものであろう。

上の例文中用いられている meaning なる用語は, function を表す言葉であり, 言語の中では syntactic meaning を表すものであり, それは発話者との関係に於ては言語主体の intention としての idea であり, idea は思惟の原型であると同時に存在者の形相でもあり, 又思惟と存在とを結ぶものでもある。従って, 文法上の述語の考察も究極的には論理と認識とを通じて存在論にまで行かねばならぬ。新しい言語学の展開は, 言語と論理との根柢となるべき存在論の新しい展開にかかっていると云うも過言ではない。

(昭和41年9月30日 受理)

[注]

- (1) 両角克夫:「文学に於ける言語」(英文学研究 Vol. XXXII No.1) 1955
全 :「言語と概念と論理」(英文学研究 Vol. XXXVIII No.2) 1962
 - (2) Ogden and Richards: The Meaning of Meaning p.149, 1952
 - (3) "The so-called 'animal language' always remains entirely subjective; it expresses various states of feeling but it does not designate or describe objects....."
E. Cassirer: An Essay on Man p.150, 1953
 - (4) 松本正夫:現代存在論の諸問題 pp.44-46 (上智大学) 1965
 - (5) 沢田充茂:現代における哲学と論理「主語と述語」 p.67 (岩波書店) 1964
 - (6) 西田幾多郎全集第5巻「述語的論理主義」 pp.58-71 (岩波書店) 1965
 - (7) Otto Jespersen: The Philosophy of Grammar pp.108-116
 - (8) H. Sweet: New English Grammar p.10, 1891
 - (9) 細江逸記:動詞時制の研究(泰文堂) 1932
- * * *
- F. Copleston: A History of Philosophy (Burns and Oates) 1966

Summary

Predicate

— **A Study of Category** —

Katsuo MOROZUMI

This essay treating of Predicate from the point of view of Category falls into seven parts as follows: —

I Introduction presenting the core-problem of the subject of this essay

II Subject and Predicate from the grammatical point of view

III Subject and Predicate in Aristotelian logic

IV Predicate in Medieval ontology

V Category in Modern Philosophy from Descartes to Hegel and Neo-Kantianism

VI Predicate in the Metaphysics of Nishida who introduced such concepts as "basho (place, field)" and "mu (nothing)" based on the metaphysics of Zen and Oriental philosophy.

VII The Background of Grammatical categories

In recent linguistics such a tendency as to separate language from logic and being seems dominant, but the author tries to indicate the limit of this nominalistic view and to form a new bridge between them in order to promote the knowledge of language by surveying the historical and traditional aspects of the logical and ontological foundation of the principle of Predicate and Category.